

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ヒッタイト語は何故“象形文字”で書かれなかったのか？
Auther(s)	大城, 光正
Citation	ニダバ, 30 : 1 - 7
Issue Date	2001-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048077
Right	
Relation	



ヒッタイト語は 何故“象形文字”で書かれなかったのか？

大 城 光 正

1. はじめに

1906年にヒッタイト王国の都がトルコのボアズキョイで発掘されて以来、同遺跡の王宮文書庫からはすでに3万枚以上に上る楔形文字粘土板文書が出土している。これらの90パーセント以上はヒッタイト語の文書で占められ、残りがパラ語、(楔形文字)ルウィ語、シュメール語、アッカド語、ハッティ語、フルリ語の文書である(Laroche(1971))。これらの言語のなかでも、ヒッタイト語とアッカド語は特に重要な位置を占めており、国王の行動記録や年代記、ヒッタイト法典、属国との条約、国事に関する典礼・宗教文書等はヒッタイト語で、ヒッタイト王国と他国との条約・書簡文書は当時の外交言語であったアッカド語で記述されている。更に古代アナトリアでは、このような楔形文字文書以外に、ヒッタイト象形文字(Hittite Hieroglyphs)と呼称される文字資料も存在していた¹⁾。同文字資料の大半は、紀元前1200年前後のヒッタイト王国滅亡後に、ルウィ系民族によって北シリアや南東アナトリア地域に作られた都市国家群の遺跡から発見される石碑文で占められているが、ヒッタイト王国時代においても、楔形文字と併記された王や王妃等の印章と、僅少の石・岩壁碑文が存在している²⁾。ヒッタイト王国滅亡後にルウィ系民族によって作成された石碑文がルウィ語で記述されているのは当然であるが、ヒッタイト王国時代の国王による象形文字碑文も同様に、ヒッタイト語ではなく、一貫してルウィ語で記述されている。つまり、何故にヒッタイト王国時代の象形文字碑文がヒッタイト語で記述可能でありながら記述されず、一貫してルウィ語で記述されているのであろうか。以下において、その根拠をヒッタイト王国時代後期の民族・言語事情を考察することによって検討してみたいと思う。

2. ヒッタイト王国における他民族の影響

ヒッタイト王国史の時代区分としては、古王国時代、中王国時代、新王国(帝国)時代の3区分が一般的である³⁾。古王国時代はアナトリア先住民のハッティ民族・文化の影響が強く看取されるが、中王国時代以降はハッティに代わってフルリ民族・文化の影響が反映するようになった。その影響は当初より強大で、いわばヒッタイト王室はフルリ系王室と言えりぐらいの改変が起こったようである(Güterbock(1954))。このことは、王位継承者が実際に王位に就くと、自己のフルリ名から新たにヒッタイト王名に改名することからも推知される：

タスミ・シャルリ (Tašmi-šarri) > トウトハリヤ3世 (Tuthaliya III)

ウルヒ・テシュブ (Urhi-tešup) > ムルシリ3世 (Muršili III)

[.....]・テシュブ ([.....]-tešup) > ムワタリ2世 (Muwatalli II)

ヒスミ・シャルマ (Hišmi-šarruma) > トウトハリヤ4世 (Tuthaliya IV)

更に、中王国時代と新王国時代の王妃の名前にもフルリ系が認められる：

トウトハリヤ2世妃：ニカルマティ (Nikalmati)

アルヌワンダ1世妃：アスムニカル (Ašmunikal)

トウトハリヤ3世妃・スッピルリウマ1世妃：タドゥヘパ (Taduhepa)

スッピルリウマ1世妃・ムルシリ2世(?)妃：マルニカル (Malnikal)

ムワタリ2世・ムルシリ3世妃：タヌヘパ (Tanuhepa)

ハットウシリ3世妃：プドゥヘパ (Puduhepa)

上記の人名要素には一部意味不詳のものもあるが、フルリ語で解釈可能な要素を含んでいる：tašmi-“(神名要素)”、šarri“王”、urhi-“真の”、tešup“(フルリ神)テシュブ神”、hišmi-“明瞭な”、šarruma“(フルリ神)シャルマ神”、nikal-“月女神”、mati-“賢明な”、ašm-“?”、tad-“愛す”、hepa(t)“(へパト女神)”、mal-“?”、tan-“為す”、pud-/wud-“?” (Laroche(1980))。

しかしながら、フルリ系の強い影響化にあったヒッタイト王統は、ムワタリ2世によるハットウサからタルフンタッサへの遷都によって大きく変容することになった。タルフンタッサの正確な位置は現在のところ同定されていないが、エジプトとシリアの覇権を争って会戦したカデシュへのルートも考慮するならば、アナトリア南部のキツワトナ地域のどこかであることが多くの研究者によって推察されている⁴⁾。キツワトナは従来アナトリア南部を占めていたルウィ系民族とアナトリア東部からシリア地域に勢力を張っていたフルリ系民族の両民族の影響が混在的に認められるところであったので、この時期を境にして、ルウィ系の勢力が王宮内部に進出していったものと推察される。そのことは、ムワタリ2世没後に即位したウルヒ・テシュブ(=ムルシリ3世)がルウィ勢力圏外のアナトリア北部のハットウサに再度遷都したにもかかわらず、王宮文書庫からルウィ語によるキツワトナ典礼文書、ルウィ医術師ツアルピヤの典礼文書、SALŠU.GI(老女)典礼文書、各種の呪文テキスト等が出土していることから推察される (Laroche(1971 :135-139))。そして王国内の彼らの勢力は王国滅亡後、アナトリア南東地域に移動してヒッタイト文化継承を自任するルウィ系の都市国家建設に至ったものと思われる⁵⁾。

3. ルウィ系の影響

以上のことから、ヒッタイト新王国時代のムワタリ2世以降はルウィ系の影響が強くなり、同王宮内では、従来のフルリ系の基層にルウィ系の上層が重層的に形成される形になっていたと推定される。従来のヒッタイト史研究では、フルリ系の影響については注目されてきたが、ルウィ系の影響については過小評価されてきた。しかしながら、同影響は従来の王国内部の諸々の国事制度や慣習の変更にまで及ぶことはなくとも、王宮内でのルウィ化(Luwisim)が着実に浸透していたこと

が以下の指摘からも推知される。

3. 1. ルウィ系固有名詞

上記のいくつかのルウィ系人名以外にも、ムワタリ2世が遷都したタルフンタッサ(Tarhuntašša)の都市名は、ルウィの信仰神であるタルフント神(Tarhunt)とルウィ語属格形容詞形成辞(-ašša)の合成形で、“タルフント神の(町)”という意味に解釈される。また、王国内で崇拜されたアヤンティ神(Ayantī)、アルマ神(Arma“月”)、ダッタ神(Datta)、イマルシヤ神(Immaršiya)、サンダ神(Šanda)、スワスナ神(Šuwašuna)、ティワト神(Tiwat“太陽”)等の神名や天候神の(形容詞)添え名 pihāššašši-“輝き”、及び、これらの神名を付与した人名や、nani“兄弟”、wašu“良い”、ziti“人”等のルウィ語形を付与した人名等が確認される(詳細はLaroche(1966))。また、1986年にドイツ考古学隊によってハットウサのスフィンクス門近くから、唯一の青銅製の楔形文書が発見された。同文書はヒッタイト王トウトハリヤ4世と、ムワタリ2世によって遷都されたタルフンタッサの当時の王クルンタ(ムワタリ2世の第2子)の間で交わされた条約文書で、内容的にはクルンタのヒッタイト王位が確約されていたことが暗示されている王国後期の国情を知る上での貴重な資料である。しかも、実際に都ハットウサからヒッタイト王を意味するクルンタの印影(印章の象形文字:MAGNUS.REX LABARNA CERVUS-tai (SOL.ARA)“大王、ラバルナ、クルンタ、我が太陽”)が出土していることから、同王をトウトハリヤ4世の次王に位置づける説も有力である。この説に従えば、クルンタ(Kurunta)がルウィ系の鹿の守護神(Runt-神)にちなんだ名前であるので、同王はヒッタイト王のなかで唯一ルウィ系の王名を持った王と言える(Laroche(1966:101), Otten(1988:3-5))。なお、同王をヒッタイト王(王名は破損していて不明)と条約を結んだタルフンタッサ王のウルミ・テシュブ(Ulmi-tešup)と同一視する説があり、この説によれば、フルリ系の名前ウルミ・テシュブからルウィ系のクルンタへの改名と言えるが詳細は不明である⁶⁾。

3. 2. 注釈語彙(Glossenkeil-words)

ヒッタイト語文書のなかで、単語の直前に1本、又は、2本の斜め楔形字形が付加された語彙が見られる。この斜め字形が付加された語彙は一種の注釈語彙を示し、ドイツ語でGlossenkeilwörter と呼称されている。従来、同語彙はヒッタイト語本来の語彙ではなく、大半がルウィ語起源の語彙と示唆されてきたが、最近の Melchert(2000)の指摘によれば、ルウィ語起源以外の語彙も含まれていることが明白になり、むしろ外来語・借用語を明示した語彙群と解釈すべきであろう⁷⁾。Kammenhuber(1969:262,287-288)によれば、同語彙の使用はムルシリ2世以降で、特にハットウシリ3世・トウトハリヤ4世以降の使用頻度が高いという指摘がある。ムルシリ2世以降の同種類の語彙の増加は同王によるアナトリア南西部のルウィ民族国家群(アルツァワ国、セハ河国、ハパラ国、ミラ国等)や北東部のアツィ・ハヤサ国の征服・平定による属国化が契機になったと思われる。しかし、王国後期の急激な増加傾向は、ムワタリ2世のタルフンタッサ遷都を契

機にした王宮内のルウィ系勢力の進出と無関係ではないと考えられる。

3. 3. 象形文字碑文

上述のように、象形文字碑文の大半は、ヒッタイト滅亡後の紀元前10世紀から8世紀にわたるルウィ語系の文字資料であるが、ヒッタイト王国時代においても、僅少ではあるがムワタリ2世以降の治世時期の象形文字碑文が残っている。各碑文は長期にわたって風雨にさらされていたために保存状態はあまり良くなく、十分な判読に至っていないのが現状である。

ムワタリ2世:シルケリ(Sirkeli)碑文

ハットウシリ3世:フラクティン(F1raktin)碑文、タシュチ(Taşçi)碑文

トウトハリヤ4世(=3世):エミルガジ(Emirgazi)碑文、ヤルブルト(Yalbur)碑文、

カラクユ(Karakuyu)碑文、ハットウサ III(Hattuša)碑文

スッピルリウマ2世:ハットウサのニシャンタシュ(Nișantaş)碑文とジユトブルク(Südburg)碑文

以上のように、ルウィ語による象形文字碑文はムワタリ2世以降に制作されていることと、これらの碑文場所も都ハットウサを除けばルウィ勢力下の南部アナトリアであることから、ムワタリ2世によるルウィ文化の強いタルフンタッサへの遷都を契機にして、ヒッタイト国王碑文が象形文字を使用してルウィ語でルウィ勢力地域に作られたことが推定される。

しかしながら国王碑文という性格上、ルウィ語の象形文字文書を石・岩壁碑文にのみ作成して、ヒッタイト語による楔形文字文書は作成しなかったということも想像しがたい。おそらく、ルウィ語の象形文字碑文と同一内容の文書をヒッタイト語の楔形文字文書として文書庫に保管していたことが推定される。現在に至る考察において、このような種類の文書、つまり、内容的には同一の文書でありながら、ヒッタイト語による楔形文字文書と、ルウィ語による象形文字碑文という2種類の文書作成の在証が唯一指摘されている。それはヒッタイト王国最後の王であるスッピルリウマ2世のアラシア征服を記述した文書(KBo XII 38 II 22-27)と都ハットウサのニシャンタシュ岩壁の象形文字碑文(冒頭部分のみ)である。つまり、同王はアラシア遠征の成果を記した楔形文字ヒッタイト語文書を王宮文書庫に、象形文字ルウィ語碑文をニシャンタシュの岩壁に残したことになる⁸⁾。

(A)ヒッタイト語文書(KBo XII 38 II 22-27):

22: ú-uk-za DUTU^{ŠI}Ta-bar-na-aš

23: mKÙ.GA.PÚ-aš LUGAL.GAL LUGAL KUR URU[Ha]-at-ti

24: UR.SAG DUMU mTu-ut-ha-li-ya

25: LUGAL.GAL LUGAL KUR Hat-ti UR.SAG

26: [DUMU.D]UMU-ŠÚ ŠA mGIDRU-ši-DINGIR^{LIM} LUGAL.GAL U[R.SAG]

27: [A-BU-YA] mTu-ut-ha-li-ya[-aš]

22-27:“余は我が太陽・(称号)タバルナ・スッピルリウマ(2世)・大王・ハッティの王
・英雄で、大王・ハッティの王・英雄のトウトハリヤ(4世)の息子で、大王・英雄の
ハットウシリ(3世)の孫である。[余の父]トウトハリヤ(4世)が……”

(B) 象形文字ルウィ語碑文(Nişantaş):

1: EGO-wa/i-mi' SOL.ARA (*277)LA PURUS.FONS.MI MAGNUS.REX
HA(REGIO) REX HEROS

2: (MONS)TU MAGNUS.REX HEROS FILIUS HA(REGIO)
REX-sa HA+LI MAGNUS.REX HEROS NEPOS

3: mi-sa-wa/i' tá-ti<sa> (MONS)TU MAGNUS.REX

1-3:“余は[我が]太陽・(称号)ラバルナ・スッピルリウマ(2世)・大王・ハッティの王・英雄で、
大王・英雄・ハッティの王のトウトハリヤ(4世)の息子で、大王・英雄の
ハットウシリ(3世)の孫である。余の父、トウトハリヤ・大王……”

4. おわりに

以上のことから、象形文字による碑文がすべてルウィ語で記述されている根拠を推察してみた
い。従来、ヒッタイト王国内では、国事に関する文書はヒッタイト語、外交的な文書・書簡類は当時
の外交言語であったアッカド語で記述することが慣例であった。しかしながら、ムワタリ2世によるハ
ットウサからルウィ影響下のタルフンタッサへの遷都によって、ルウィ系民族を支配したのみならず、
王宮内部へのルウィ系の浸透も許し、ウルヒ・テシュブの再度のハットウサへの遷都、ハットウシリ3
世の王国強化以降も同傾向に変更はなかったものと推定される。それ故、象形文字はルウィ系民
族固有の文字媒体として王国内で位置づけられたために、同文字によるルウィ語での記述の慣
用が生じて、各地のルウィ語による象形文字碑文の作成に至ったものと考えられる。つまり、王国
内では、文書ジャンル上の言語別の用途(ヒッタイト語・アッカド語)と、対象民族上の文字・言語別
の用途(ヒッタイト民族:ヒッタイト語による楔形文字・ルウィ民族:ルウィ語による象形文字)が明確
に確立していたことが示唆される⁹⁾。

注

- 1) 文字名称としては、碑文の大半が王国滅亡後のルウィ系民族による碑文であることから、ル
ウィ象形文字(Luwian Hieroglyphs)、又は、王国時代のヒッタイト民族から滅亡後のルウ
ィ系民族にわたって古代アナトリアで使用された文字として、アナトリア象形文字
(Anatolian Hieroglyphs)と呼称される場合がある(Marazzi(1990);Melchert(1996))。
- 2) 王国滅亡後の多数の碑文集については、Meriggi(1967,1975),Hawkins(2000)、王国時
代の象形文字碑文については、Gonnet(1975)、Meriggi(1975[3^e]),Masson(1979)を、

特に最近発見された碑文については、Poetto(1993),Hawkins(1995)を参照のこと。

- 3) 特に本稿に関する新王国時代のクルンタの在位を認知する王統(Neve(1993:86))：
スッピルリウマ1世 > アルヌワンダ1世 > ムルシリ2世 > ムワタリ2世 > ウルヒテシュ
プ(=ムルシリ3世) > ハットウシリ3世 > トウトハリヤ4世 > クルンタ > アルヌワンダ2
世 > スッピルリウマ2世。
- 4) キツワトナ地域のタルフンタッサの位置の同定・発掘と、同都市がハットウサ以外に一時期
王国の都であった点から、Mellaart(1993, p.420: what we need next is the discovery
and excavation of Tarhuntassa)の指摘のごとく、ヒッタイト考古・歴史学の最重要課題
に位置づけられる(更に、Carruba(1992),Alp(1993),Singer(1996)も参照のこと)。
- 5) ヒッタイト王国滅亡後の象形文字碑文におけるルウィ系の王や高官名に、アルヌワンダ
(Izgin 碑文)、スッピルリウマ(Boybeyınarı 碑文)、ハットウシリ(Boybeyınarı 碑文)、ム
ワタリ(Maraş 碑文)、ラバルナ(Babylon 碑文)等のヒッタイト王名・称号名がみられる
(Laroche(1966))。
- 6) Otten(1988:3-4),Van den Hout(1995)に対して、Gurney(1993)はタルフンタッサ王のウ
ルミ・テシュプとクルンタを同一人物とみる。
- 7) ヒッタイト語におけるルウィ語の影響については、2000年9月にドイツの Halle で開催され
た国際印欧語学会における Melchert(2000)の報告がある。同資料の入手に関しては、
現在、同教授のもと(North Carolina 大学)に留学中の松川陽平氏に心より感謝の意を
表したい。
- 8) ニシャンタシュ碑文については、Laroche(1969/70)、Hawkins(1995)を参照。
- 9) 更に、楔形文字文書に散見される職名 LÚDUB.SAR.GIŠ“木板の書記”は、木製ゆえに
長期保存の必要がない日常的な行政・経済文書の作成に関わっていたと考えられており、
その木製書板に記述された文字は、アッシュール書簡やクルル文書に見られる象形文字
の草書体(Hawkins(2000:503-513,533-555))か、未見の楔形文字の草書体かもしれな
いが、詳細は将来に待たねばならない(Daddi(1982:166-168))。

参考文献

- Alp, S. (1993) “Zur Lage der Stadt Tarhuntassa”, *Atti der II Congresso Internazionale di Hittitologia*, Pavia, 1-11.
- Carruba, O. (1992) “Luwier in kappadoken”, *Actes de la XXXVIII^{eme} Rencontre Assyriologique Internationale*, Paris, 251-257.
- Daddi, F. P. (1982) *Mestieri, professioni e dignità nell'anatolia ittita*, Roma.
- Gonnet, H. (1975) *Catalogue des Documents Royaux Hittites du II^e Millénaire avant J.-C.*, Paris.
- Gurney, O. R. (1993) “The Treaty with Ulmi-Tešub”, *AnSt* 43, 13-28.

- Güterbock, H. G. (1954) "The Hurrian Element in the Hittite Empire", *J. of World History* II/2, 383-394.
- Hawkins, J. D. (1995) *The Hieroglyphic Inscription of the Sacred Pool Complex at Hattusa(SÜDBURG)*, Wiesbaden.
- ,(2000) *Corpus of Hieroglyphic Luwian Inscriptions*, vol.I 1-3, Berlin.
- Hout Th. van den. (1995) *Der Ulmitešup-Vertrag*, Wiesbaden.
- Kammenhuber, A. (1969) "Die Sprachstufen des Hethitischen", *KZ* 83/2, 256-289.
- Laroche, E. (1966) *Les noms des hittites*, Paris.
- , (1969/70) "Nišantaš", *Anatolica* 3, 93-98.
- ,(1971) *Catalogue des textes hittites*, Paris.
- ,(1980) *Glossaire de la langue hourrite*, Paris.
- Marazzi, M. (1990) *Il geroglifico anatolica problemi di analisi e prospettive di ricerca*, Roma.
- Masson, E. (1979) "Les inscriptions louvites hiéroglyphiques d'Emirgazi", *J. des Savants*, 3-49.
- Melchert, H. C. (1996) "Anatolian Hieroglyphs", in P. T. Daniels and W. Bright(ed.), *The World's Writing Systems*, Oxford Univ. Press., 120-124.
- ,(2000) "The Problem of Luvian Influence on Hittite: When and How Much?", (handout), *Akten der XI. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft*, Halle, 2000.
- Mellaart, J. (1993) "The Present State of Hittite Geography", *Fs. N. Özgüç*, Ankara, 415-422.
- Meriggi, P. (1967) *Manuale di Eteo Geroglifico*. Parte II:Testi 1 serie, Roma.
- ,(1975) *Manuale di Eteo Geroglifico*. Parte II:Testi 2-3 serie, Roma.
- Neve, P. (1993) *Hattuša –Stadt der Götter und Tempel*, Mainz.
- Otten, H. (1988) *Die Bronzetafel aus Boğazköy –Ein Staatsvertrag Tuthalijas IV.*, Wiesbaden.
- Poetto, M. (1993) *L'iscrizione luvio-geroglifica di Yalburt*, Pavia.
- Singer, I. (1996) "Great Kings of Tarhuntassa", *SMEA* 38, 63-71.